

ある暑い土曜日(『若き日の芸術犬の肖像』から)

A Translation of “One Warm Saturday” from Dylan Thomas’s *Portrait of the Artist as a Young Dog* (1940)

坂本正雄 訳

translated by Masao SAKAMOTO

2010年10月1日受理

セーラーシャツを着たその若者は、避暑用ヒュッテの近くに腰を下ろして、色黒や色白の女たちや、かわいい顔をした女の子たちが出てくるのを見ていた。女の子たちは、爪を毒々しく赤く塗った脚で、細心の注意をしながらごつごつした石の上を歩いて、海へと歩いていった。服の背中がVの字にえぐれて、日に焼けた背中が見えていた。男は砂に、ぎざぎざの線で大きく、女の姿を描いた。すると素っ裸の子が、海から上がって、その上を走り、水をふるい落とし、絵に大きく二つの濡れた目を、それから穴を一つ、足跡を付けた真ん中に描いた。男は、女の絵をかき消して、太鼓腹の男を描いた。さっきの子が、髪を振りながら、またその絵の上を走り、太鼓腹の上に一列のボタン、一連らなりのドロップを、子供の絵のおしっこのように、貝殻がくっついた長い脚の間に落とした。

ピクニックに来た女たちとそのこどもたちの集団が周りにいた。太陽は、うだるような暑さで照らし、その下で、だらしなく水に濡れて寝そべっているものがいれば、紙バッグのことで騒ぎ立てているものもいる。城を造っているものもいたが、浜の向こうの方へと三々五々歩いてゆく行楽客たちがすぐに踏みつぶしていった。アイスクリーム売りの呼び声、ボール遊びをしているこどもたちの怒鳴りつけるような楽しい叫び声、波が腰の辺りまで来るたびに叫び声を上げる女の子たち。若者は失敗作を脇に、その陰にひとり座っていた。ピクニックに来た夫たちのなかには、ズボンをまくり上げ、サスペンダーを肩からはずし、黙ったまま、水際をびちゃびちゃとゆっくり歩くものもいた。同じように歩いている女たちは、厚手の、黒のピクニック服を着て、自分たちの脚を見て、声を上げ笑っていた。犬は石を追いかけていた。少年がひとり、元気よくゴム製アザラシに乗って、波乗りをしていた。若者はピクニックの客たちとは離れて、自分の目の前に土曜日の休日が続く広げられるのを見ていた。大衆を照らす太陽の下、つまらない一枚の絵のように、嘘っぱちで結構な休日。紙袋、バケツに手鋤、日傘に飲み物を持った、浮かれ騒ぐ家族連れ、バッグの中に日焼け止めクリームを忍ばせた娘たち、日の下で浮かれ、

熱くなり、肌をひりひりさせている。赤銅色の若い連中が胸を張っている。ベストを着て、それらをねたましそうに見ている色白のまた別の若い連中。夫たちの細くて、白くて、毛の生えた脚は哀愁を漂わせ海辺を歩いていた。ちぢれ毛の太った子、頭の毛を剃った背中丸い子など分別もわきまえず、汚い砂にまみれ、品もなく喜んでいる。そうした光景が若者の気持ちを動かした。孤独のうちに、いつもながらの恥ずかしさと哀れみを感じるまでに、芝居がかった面持ちで考えた。休みの日にはいつも外に出て、昼の日中、こうした外の世界で、汗をかいた夏の肉体の、普通ではあっても、強い体力、日の光で目覚めた体力で、それから愚かな考えの及びもつかない力で、取り巻き連中に常につきまとわれている若者らしく、小さい子がブリキの皿と一緒に空中に投げたボールを拾い上げ、立ち上がり、投げ返した。

一緒にやらないかとその子は言った。少し離れたところで、家族が誘いかけるような顔つきで立って、待っていた。服の裾をニッカーの下にたくし入れ、髪はぼさぼさの女、ワイシャツ姿の男、スリッパ姿、それから切り詰めた下着姿のこどもたち、何人も。その子は苦々しい顔をして、三柱門(訳注:クリケット)代わりの帽子の前で皿(訳注:バット代わりらしい)を持って立っている父親にボールを投げた。「一匹狼もボール遊びをやるとするか。」若者は皿がぐるぐる回っているのを見ながら、そう言った。海の方へ球を追いかけて走った。服を脱いでいる女たちの横を通るとき、機嫌を取り、片目をつぶり、お城に踏み込み、海から上がったばかりで、蛇のようにとぐるを巻いて横になっている女の子たちの中に突っ込み、靴をぬらして、海に漂うボールをつかんだ。若者は自分の身体を見せつけると、楽しい気分が戻ってくるのを感じた。「おい、ダックワース、速球だぞ。」若者は帽子の向こうの母親に向かって、声を上げた。球は少年の頭の上で跳ねた。たくさんの家族の間を縫って、サンドイッチや服の間を通して、おじさんや母親たちが、跳ねる球をさばいた。はげの男が、シャツをぶら下げたまま、とんでもない方向に投げ返した。それから一匹のコリーがそれを啣

えて、海へと持っていた。今度は皿の担当は母親だ。皿と球は母親の頭上高く飛んだ。パナマ帽をかぶったおじさんがびしゃりと犬の方へと球を叩いた。犬はまた啞えて向こうへ行ってしまった。おじさんたちは若者に、卵とクレソンのサンドイッチ、ぬるいスタウトを勧めた。若者とおじさん、それから父親はイブニング・ポスト紙を敷いて座った。潮が足許まで来ていた。

これまで見たこともない、寝そべっている人たち、こうした平穏に向かって声高に走っている人たち中を、自分も走っていると、得意な気分を味わっていたほんのちょっとの時間は、ちょうどボールのように海の中へとたたき込まれたようで、まあ、そんなふうに若者は言ったのだが、またひとりぼっちになり、身体が火照り、気分が落ち込んでしまって、若者は砂浜の離れたところ、別の男が、「ミスタ・マシューズ」と書かれた箱の上で、無表情の女たちの集まりに向かって業火の苦しみについて説教しているところへと歩いていった。豆鉄砲を持った少年たちが、その男の横に静かに座っていた。ぼろを着た男の帽子には何も入っていなかった。ミスタ・マシューズは冷たい両手を振りながら、その日が休日であることを怒鳴り散らし、震える箱の上から夏を呪っていた。新しい暖かみが必要なんですと叫んでいた。太陽の強い日差しがミスタ・マシューズの骨の中へと染みいった。ミスタ・マシューズは上着の襟のボタンをかけた。谷からやって来た子どもたちは落ちくぼんだ厚かましい目つきで、歌うような声でよく喋り、貝殻のような薄い胸で、操り人形の見せ物や三輪車乗りの周りに集まっていた。ああいうのはだめだとミスタ・マシューズは言った。女の子が下着のまま髪をとくしたり、化粧したりするものだめだ、しとやかに器用な手つきでタオル地の被いの中で着替えるのもだめだと言った。

ミスタ・マシューズが夕焼けに染まった町をこき下ろし、へそを出した子どもたちがアイスクリーム売りの周りで踊っていたが、その子らを追い払い、女の子たちの日焼けした太ももに黒のコートを巻き付け、「下がった、下がった。もう夜が近い。」と言ったとき、若者は落胆して立ち上がった。肩には影を背負っていた。そしてポースコール〔訳注：Swanseaから南南東に30kmほど行ったところにある海辺の町。〕にあるコーニィ・ビーチのことに思いをはせた。きつと友達は女の子とジャイアン・レーサー〔訳注：ジェットコースター〕の上で揺られていることだろう。あるいは幽霊列車に乗って骸骨トンネルを抜けるとき涙を流しているだろう。レズリー・バードは腕一杯にココナツを抱えているだろう。ブレンダはハーバートと射的場だ。ジル・モリスは、サクランボを載せたカクテルをエスプラネード通りで、モリーに買ってやる。俺はここに立って、ミスタ・マシューズの話の聞いている。退職した飲んべえだ。ミスタ・マシューズは夕方の浜辺で、夜が来たとわめい

ていた。ポケットの中には手に入れたばかりの金、そして土曜日は真っ赤になって、過ぎようとしていた。

ひとりになり、みんながこっちに来ないかという誘いを若者は断った。ハーバートが車高の低い、赤のスポーツカーの後ろにGBを乗せて、父親の家を訪ねていた。GBはラジエータに乗った海の花、妖精といったところだ。でも「そんな気分じゃないんだよ。おっさん。」と言った。「静かに過ごそうと思ってね。まあ、そっちで楽しんでくれ。あんまり飲むなよ。」おもしろくもない女たちの真真中にさびしくつつ立って、日が沈むのをじっと待っていた。女たちは予言者のように立つ若者の後ろで、空の一点をじっと見つめ、朝が戻ってくるのを願っていた。ああ、縁日の指輪だの射的だのに、金を無駄遣い、一ポンド六シリング足らずのクロム色の談話室にトルコたばこを一本啞えて座る、女の子たちにこの前のことを話して聞かせる、談話室の窓に飾ってある椰子の葉陰越しに、太陽が遊歩道の向こうに沈むのを見る。車椅子、脚が不自由なもの、後家さん、バーミュエダを穿いてスカーフを結んだ週末妻、髪を頬のあたりでカールさせた、今風ファッションの女の子たち、眼鏡を掛けたブスを連れ、あどけなくて、威張りかえり、大きな声で喋っている悪ガキ、足許のポメラニアン、それから自転車に乗った伊達男たちも見える。ロナルドは「レディ・モイラ号」に乗ってイルフラクーム〔訳注：イングランド南西部Devonshireの海岸保養地。自転車で行くにはかなり遠い。〕まで行ったことがある。そうだ、大きなホールにブラニフラッド〔訳注：Swanseaの海岸沿いの小さな村〕の連中が来ていたら、砂地の自宅に友達がひとりで待っていることなんか忘れて、酒でも食らおう。そして六時には忍び足で帰る。夕方は礼拝堂みたいに退屈だ。友達は皆もう、自分たちの楽しみへと姿をくらましていた。

若者は思った。詩人は異聞の詩を抱えて、生きる、歩む。展望のある男は他には何も要らない。土曜日は欲がむき出しになる日だ。家に帰り、ボイラーのそばの寝室でくつろごう。でも男は生きて歩む詩人ではなかった。海沿いの町で暑い休日を過ごしている若者だった。二ポンドの小遣いを持ち、展望はなかった。二ポンドと、散らかった砂浜に立っている小さな身体があるだけだ。静穏は老人のもの。そうして若者は転轍機を越えて、路面電車が走る道路へと立ち去った。

若者はヴィクトリア庭園〔訳注：Neathにある公園。ヴィクトリア女王の60周年祭を記念して、1897年開設。〕にある花時計に歯ざりした。

「気取り屋はつぎには何をやるっていうんだ。」声に出して言った。白タイトルの小便器の真向かいのベンチに座っている若い女がほほえんで、小説を下におろした。

女は栗色の髪を頭の上高く昔風に整えていた。緩く巻いた巻き毛に、丸パン状の束髪がひとつ。ウルワー

ス〔訳注：いわゆる百貨スーパー。〕の白バラが一本生え、垂れて耳に触れていた。胸のあたりに紙製の赤い花をピンで留めて、白のワンピースを着ていた。それから遊楽市で買った指輪とブレスレット。目は小さく、真緑だった。

若者は一目で注意深くそして冷たく、女の姿の尋常でない部分を捉えた。頭から足先までねめ回したにもかかわらず、その物腰それからほほえみと整えた頭髪のなかにある、落ち着いて物怖じしない女の確信、意識はしていなくても分かっている様子、そうしたものに若者の指は震えた。女のその穏やかな不思議な面持ち、それは若者にも理解できるものだった、それらによって品のない出会いやつきあいの糸口を探る流し目からも身を守っているのだった。ワンピースは長く、襟は高かったが、塗りの悪いベンチに座って裸も同然だった。そのほほえみはコットンの生地の下には何も付けていなくて、しみひとつない身体ということ明らかにしていた。女は罪の意識もなく待っていた。

なんてきれいなんだ。若者の心はことばを選んでいった。その目は女の髪、ほてった白い肌を見ていた。きれいな身体でばくを待っている。君は自分が待っていることさえ知らない。そしてばくはそれを言うこともできない。

若者はもう立ち止まっていた。そして見つめていた。カメラを前に自信にあふれた女のように、その女は腰を下ろしたまま、ほほえんでいた。腕を組んでいた。首を少し傾けて、バラの花が首筋をなでていた。女はばくの賞賛を受け入れた。百万の女の中のひとりがばくの長い注目を独り占めにした。そして浮かれた若者の愛を女は抱きしめた。

ブヨが若者の口に飛び込んだ。恥ずかしい思いで先を急いだ。庭園の出口で、見納めと思えば振り返って見た。若者が不意にぎこちなく行ってしまって、女は平静を失っていた。狼狽して、その歩みを見つめていた。片方の手がまるで手招きするように上がっていた。立ち止まれば、呼び止めたかも知れない。若者は角を曲がり、それから女の声聞いた。いくつもの声、みんな女の声だ。自分の名前を呼んでいた。みんな自分の名前だ。壁になった灌木の向こうから聞こえてきた。

さて、恋に夢中の若者は、びくびく。つぎには何をしでかすかな。誰もいない「ヴィクトリア」のホールでゆがんだ鏡に映る自分に尋ねていた。猿のような、だらっとした顔、額にはバスビールの三角シールを付けて、まぬけた冷笑を返した。もしビーナスが皿に乗っかってやって来たら、ピネガーを塗って欲しいって言うね。メロンを薄切りにしたような、赤い唇が二枚、喋っていた。あの女だったら、自分の罪の意識をぬぐい去ってくれる。あの女だったら、自分の恥をすすいでくれる。よし、足を止めて、話しかけてみようじゃ

ないか。若者は思った。

庭園に妙な女がいただろう、若者の影が答えた。あの娘は自然が作り出した子なんだ、ああ、ああ。髪に露がかかっているのが見えたら。雑誌に出てくる男みたいに鏡に話しかけるのをやめるんだな、おまえのことはよく分かっているよ。

背後でまた別の顔が、水ぶくれして垂れあごだ、ふらふらと揺れていた。男は振り返って、バーテンが何か言うのを聞いた。

「一杯どうです。気が滅入るばかりですかい。墓場から出てきてぬくもった死体みたいですよ。このバーのためにこの一杯飲んでください。今日はビールはただです。それからただの××クス。」バーテンはビール樽の取っ手を引いた。「極上のものしかこの店では出しません。さびのついた注ぎ口からそのままだ。変な顔になってますぜ。」バーテンは言った。「難破船からひとり救い出されたみたいだ。救い出された残骸みたいだ。みんな見てますぜ。」バーテンは自分でついでビールを飲んだ。

「ビールを一杯くれるかね。」

「ここをなんとお思いで。パブだとも。」

ホールの真ん中で、指を深く突っ込んで、女の子の頭のような泡をびかびかテーブルの上に、乗せている若者がいた。泡だった黄色の髪をその上に乗せた。

「ああ、汚ねえ、汚ねえ。」バーテンがカウンターの後ろから走り出してきて、言った。そうして乾いた布巾で、泡頭をふき落とした。

自分の帽子で汚れを避けながら、若者は自分の名前をテーブルの端に書いた。そうして文字が乾いて消えていくのを見ていた。

張り出し窓から見ると、もう使われなくなって砂をかぶった鉄路の向こうに海水浴客たちが黒い点になって見えた。それからずんぐりした小屋、パンチとジュディの回りを跳びはねている小男、宗教儀式用の小さな円陣。ひとで一杯のその荒れ野を若者は歩き回りまた遊んで、自分のやけっぱちな気分に言い訳して、自分では拒絶してはいたが、話し相手を捜していたのだ。そしてそのあと、自分の本当の幸せを見つけ、そしてその一分半たたないうちに、紳士たちの象と花時計の横で、うろたえどぎまぎしながら彼女を失ったのだった。歳を取れば、かしこくもなって、それでもろくなことはないだろうが、若者はきつと鏡をのぞき込んで、自分の発見と喪失が自分の顔、眼の下のくまあるいは口の周りのしわに記されているかどうか確かめるだろう。もし鏡に映し出されたゆがんだ像が示してくれる答えが出てこないとするれば。

バーテンが若者のそばに来て座り、調子のはずれた声で言った。「全部話しちまいなよ。この頭んなかはきちんと整頓された秘密の貯蔵庫だ。」

「話すことなど何もない。ヴィクトリア庭園で女の

子を見かけた。でも人見知りして話しかけられなかった。まあ俺たちを助けてくれるちょっとした神様だ。」

娘の冷めた顔、喋っている間も自分をとがめ許している笑みを前にして、愛と苦悩の深みにはまっけても、ひとと仲良くしようと思っていた自分の気持ちを恥じて、若者はその娘をベンチの上で犯し、つばとのこくずのなかに引きずり倒し、そして飾り立ててやると、バーテンは言った。

「おれは大きいのがいいな。一度は丸っこいベッシー、一度はガス工場をくると曲がったところ。おれは生涯の好機を逃したんだよ。五十人もの素っ裸の美女がいたのに、ブンゼンバーナー〔訳注：ガスバーナーの一種、円柱形。〕を家に忘れちゃった。」

「同じ奴を。」

「同じ種類という意味か。」

バーテンはビールを一杯グラスについて、飲んで、また一杯ついで。

「俺はいつも客たちと一杯飲むんだ。それで五分五分というわけだ。で、おまえとおれはふたり、心うちひしがれたひとりもん同士というわけだ。」バーテンはもう一度腰を下ろした。

「おれの知らないことを言おうたって無理だぞ。おれは帝国からやって来たコーラスガールたちを二十人以上、この居酒屋で見ている。活版屋みたいに飲んだくれて、ああ、あの娘っこ、あの脚。」

「今夜は来るのかい。」

「この二、三日、女の半分でも見かけた奴はたったのひとりだ。」

「残りの半分は取っておいてくれ。」

飲んでべえの酔っぱらいが眼には見えない白線の上を歩いていた。バーテンも一緒になって千鳥足で部屋を端まで行って、男にビールを一ポイントついで。「今日のビールはただだ。ただの××クスだ。今日は一日、日に当たってたろう。」

「一日中だよ。」酔っぱらいは言った。

「日に焼けたみたいだな。」

「そりゃ、酒のせいだ。一日、飲んでたからな。」酔っぱらいは言った。

「休日もそろそろ終わりだな。」若者は自分のグラスにささやきかけるように言った。黒歌鳥よ、さようならだ。運命の瞬間は過ぎたんだ。若者は思った。色塗りののがきに、テリア犬、その下で望遠鏡をもっている、尻敷かれの、細脚男、浜辺に山のような尻をした女が漫画風に描かれている。スタウトを飲みながら、どうしても見たいという気持ちでそれを見つめていると、陽気なバーテン、つぶれた帽子〔訳注：crush hatという型くずれしない帽子がある。〕をかぶった酔っぱらいのせいで、そのついていない日を思い、がぶ飲みしていた。酔っぱらいは帽子を額にかぶり、帽子の下から覗いている一房の髪がまぶたをくすぐった。酔っぱらい

の目は新参者の鋭い目で、ぼさぼさ髪の若者を見ていた。その目は、にやっと笑った顔の微妙な意味合い、死の形を空にかすかな動きで描いているそのしぐさのひとつも逃さない目だった。若者の方は朽ちかけている部屋の隅で、口に手を当て、咳をした。そして麻薬の染みたたばこウェイトをふかした。

でも、バーテンがカウンターの向こうで、口笛を吹きながら、食器をガチャガチャいわせ、そして水をすくっては飲みしていたときに、酔っぱらいがこちらめがけて、なみなみ注がれたグラスを持って、ゆらぐ船をぐるっと回るかのように、その威厳を抱え、うねうねとやってきた。若者は心のうちに秘めた実態のない悲しい思いを、顔を赤らめ、鼻であしらい、振り捨て、憂鬱な面持ちで固いつば付きの中折れ帽子をまっすぐ直し、一見客の振りをおしまいにした。自分の心の真ん中には自分が何者かという意識ははっきりしていて、もうひとつの肉体のような自分の周りにできたいつもの世界だ、そのなかにいま座り、あらゆることが起きつつある、このむさくるしい、外へとどンドン広がっていく町の外れにある海辺のちんけなホテルの普通の部屋に、悲しくも満足を感じている。タウィ川が自分に向かって押し寄せてきても、もう暗い内部の世界なんかは要らなかった。常軌を逸した凡人たちが、自分たちの家から、品のない建物から、工場、通り、こうこうと明かりをつけた店、不敬なる礼拝堂から、終着駅や集会所、下り小路、舗道、貯蔵所の裏手の湾曲門や避難所、穴蔵から、つまりは町中のみんなが持っているとっぴな知能の世界から音を立て、旗を振り立て、大声を出しながら、うようよと出てくるのだ。

酔っぱらいがようやく若者のところまでやって来た。「ここを触ってみろ。」酔っぱらいが言った。そうして振り向いて、自分の尻をぽんと叩いた。

バーテンが口笛を吹き、飲み物を置いて立ち上がり、若者が酔っぱらいの尻に触れたのを確かめた。

「何か触れるものがあるかい。」

「何も。」

「その通り。何もないんだよ。何も。手に触れるものはな。」

「じゃあ、どうやって座れるんだ。」バーテンが尋ねた。

「医者のの削り残しで座るのさ。」酔っぱらいは腹をたてて言った。「前には、お前ら同様、立派な尻があったんだ。ダウラスの町の地下で働いていたんだ。そうしたらこの世の終わりが落ちかかってきた。尻を失った代わりにどれくらい手に入れたか知っているか。四ポンドと三シリングだ。尻つけつひとつに、二ポンドと半ペニーが三枚だ。豚一匹より安いじゃねえか。」

ヴィクトリア庭園で出会った娘が友達ふたりを連れて、入ってきた。ひとりは金髪の若い娘でいまがまさに盛りだった。それから服も化粧も若作りの中年女。

三人はひとつのテーブルに座った。若者がお気に入りの娘がジンのワイン割りを三つ頼んだ。

「爽快な天気じゃない。」中年女が言った。

バーテンは「どこかしこも晴天ばかりで。」頭を何度も下げ、笑顔を振りまいて、バーテンは女たちの前に飲み物を置いた。「お姫様方はこんなところではなくてもっとよろしい居酒屋にお越しかと思ってたんですよ。」

「あなたがなくて、何がいい飲み屋って言うの、イケメンさん。」金髪の娘が言った。

「ここはリッツカサボイホテルだよわね、ねえ、マスター。」ヴィクトリア庭園の娘が言い、バーテンにキスを投げて寄こした。

窓際の席に座った若者は、その娘が薄暗い部屋に急に入って来たことで、まだどぎまぎしていた。自分でキスを受け止め、顔を赤らめ、その部屋から飛び出したいと思った。奇跡を起こしてくれる庭園を通り抜け、自分の家に飛びこみ、頭をベッドに突っ込んで、一晩中そこにいよう。よそ行きの服を着たまま震えながら、耳には娘の音が響いている。自分の閉じたまぶたの下に娘の緑の目が大きく開かれているのだ。でも血を熱くしたいかれた少年なら自分の愛情を夢の中まで持って行って、恥の一杯詰まった寝室に横になり、羽根のようにふわふわの太った胸とじめっとした枕に乗せた顔に身体を預けてすすり泣くことだろう。若者は自分の年齢そして詩を思い出し、動くまいと思った。

「ありがとうよ、ルー。」バーテンは言った。

あの娘の名前はルー、ルイズ、ルイザだ。スペイン系か、フランスか、それともジプシーか。でも若者はその声からどの通りで育ったかを言うこともできた。友達の声も聞いて、その抑揚でどこに住んでいるか分かった。それから中年女の名はミセス・エメラルド・フランクリンだった。このお婆さんは「ユダヤ人の豎琴亭」に出入りしている。酒をすすり、人の顔を盗み見て、壁時計を見る。

「わたしたち、浜辺でマシューズ・ヘルファイアの歌を聴いてたのよ。あっちをやめろ、こっちをやめろって。それでマシューズはね、朝食の前に酒を半リットル、昔は飲んでたのよ。」フランクリンのお婆さんは言った。「たいしたずうずうしさよね。」

「それでしょっちゅうつまらないことに気が向いているのよ。」金髪の娘が言った。「カウンターの向こうに貼ってあるラモン・ナバロ〔訳注：Ramon Novarro メキシコ生まれの俳優。同性愛と酒が原因でトラブルが絶えなかった。〕以上に信頼できないわ。」

「おっと、俺も出世したもんだ。先週は、チャーリー・チェイスだったぜ。」バーテンが言った。

フランクリンのお婆さんは手袋をした手で、空のグラスを上げ、ベルのように振った。「男って、嘘つきなのよ。いつだって。母親の破滅の捨て子がそこらじ

ゅう一杯。」

「特にフランクリンの旦那だな。」バーテンが言った。

フランクリンのお婆さんは言った「でも伝道師の言うことにも当たりくじみたいなものがあるのよ、ねえ。男と女のことではね。止水栓〔訳注：流れ出す液体を止める道具全般。〕でも探しに、海辺の散歩に出てご覧なさい。ソドムとゴモラに行った方がまだましよ。」

金髪娘が笑った。「グランディお婆さんの言うことを御傾聴よ。あの女この前の水曜日、黒人と一緒にいたわ。美術館を回ったところ。」

「インド人だよ。」フランクリンのお婆さんが言った。「大学の人さ。で、思い出させてくれてありがとう。だれでも一皮剥けば、みな兄弟。でもねわたしの家系には、タール刷毛はないね。」

「まあ、まあ。」ルーが言った。「そのことはまた今度ね。愛があるからよ。今日はわたしの誕生日なの。休日よ。ちょっとは楽しみたいわ。にゃあおー。にゃあおー。マージョリー、エメラルドにキスして。そして友達になって。」ルーはほほえみ、二人に向かって笑い声を上げた。それからバーテンにウインクして見せた。バーテンは、三人のグラスになみなみとついだ。

「あなたの青い目に、マスター。」隅っこの若者は、ルーの目には入っていなかった。「それから向こうのおじいちゃんに。」ルーは言って、身体を揺らしている飲んべえにほほえんだ。「あの人、今日で二十一歳よ。ほら、にっこりさせてやったわ。」

酔っぱらいは倒れそうになるくらいに深々とお辞儀をして、帽子を上げ、炬棚によるめきながらぶつかったが、自在に動く手に握られた酒のグラスは岩のようにしっかりしていた。「カマーゼンシャー中で一番の器量よしだ。」酔っぱらいは言った。

「ここはグラモーガンシャーよ、父っつあん。地図を忘れたの。ほら見て、ワルツを踊っているわ。グラス、気をつけてね。クルーシェン〔訳注：緩下剤〕をお腹に入れた感じなのね。ねえ、もっと速く。チャールストンを踊って見せてよ。」

酔っぱらいは、グラスを高く掲げて、踊り、それから倒れた。ずっと一滴もこぼさなかった。ほこりのたまった床の上、ルーの足許に伸びて、そっと親愛の情を示して、ルーににやんと笑いかけた。「倒れたよ。尻っけつがあつたら、騎兵みたいに踊れたんだがな。」

「この人、このあいだの爆発事故でお尻がなくなつたんだよ。」バーテンが説明した。

「いつなくなったの。」フランクリンのお婆さんが言った。

「ダウリスでゲイブリエルが笛を吹いたときさ。」

「足を引っ張らないでよ。」

「楽しいよ、エムお婆さん。ほら。演技場から起き上がれよ。」

酔っぱらいは尻をしっぽのように振って、ルーの足許でうなり声を上げた。

「頭をわたしの足の上に載せて、楽しんでなさいよ。そこに寝かしといたら。」ルーは言った。

酔っぱらいはすぐに眠り込んだ。

「だいたい酔っぱらいはお断りよね。」

「これからどうなるか分かるでしょ。」

「残酷なフランクリンおばさん。」

「さあ、仕事に戻りなさいな。隅っこにいるあの若者に酒を出しなさいよ。ペロが垂れているじゃないの。」

「残酷な女。」

フランクリンのおばさんが若者のことを話題にすると、ルーが近視の目で酒場をじっとすかして見た。若者が窓を背にして座っているのが見えてきた。

「^{グラス}眼鏡がいるわね。」

「夜が明けるころには眼の前にグラスが一杯よ。」

「違うの、本当に、マージョリー。あそこに誰かいるって分からなかったのよ。ねえ、ちょっと、隅っこにいるあなた。」ルーは言った。

バーテンが明かりをつけた。「闇の中の光明だろ。」

「あら。」ルーが言った。

若者は、ルーがあまりじろじろと見ているので、動こうとしなかった。その目線は二人をつなぐ一本の光の筋みたいに輝く魔法だった。その目線から逸れてはいけなかった。あるいはびっくりさせてルーに喋らせてもいけないと思った。それで若者は自分の眼に浮かんだ愛情を隠そうとしなかった。ルーはこの胸の内にある心臓をくるくる回して、どんな音よりも大きく鼓動させたのだから、それくらい簡単に自分の愛情も見抜くはずだ。ふたりの友人は早口でがんとおしゃべりしていた。バーテンはカウンターの向こうでつばを吐き、グラスを磨き、念入りに仕事をして、がちゃがちゃと音を立てていた。酔っぱらいはグーグーといびきをかいて寝ていた。ぼくが傷つけられるものは何もない。バーテンはあざ笑うがいい。エムおばさん、グラスに向かってくすくす嗤えばいい。ぼくはみんなに向かって喋っているんだ。ぼくはクローバーの中を心地よく歩いている。ぼくはばかみたいにルーを見つめている。あの娘はぼくのもの、ぼくの百合の花。ああ、恋人。恋人。お嬢様では決してない。単調な喋りっぷりだもの。あの娘は深海ダイバーみたいに酒を飲んでいる。でも、ルー、ぼくは君のものだよ。そしてルー、君はぼくのものだよ。若者は娘が静かにしていることを考えまいとした。その美しさをひねってことばにするのはよしにした。あの娘は太陽の下、月の下では無だ。ただぼくのものなんだ。恥じと思うこともなく、信念を持って、若者はルーにほほえみかけた。何が起きても構わないという強い気持ちだったのだけれど、ルーがほほえみを返してくれると、若者

の指はヴィクトリア庭園で震えたのと同じように、また震えた。頬は赤くなり、心臓は疾駆した。

「ハロルド、お若いさんのグラスが空だよ。」フランクリンのおばさんが言った。

バーテンはふきんを片手に、水が垂れているグラスをもう一方に持って、じっとしていた。

「耳に水でも入ったの。お若いさんに酒をついでやりなよ。」

バーテンはふきんを目に持っていった。泣いていたのだ。わざとらしく涙をぬぐった。

「特別席に座って、初演を見ているような気がしていたんだよ。」バーテンは言った。

「耳じゃなくて、頭に水が入ったようだね。」マージョリーが言った。

「『一目惚れ、すなわちまた善男いかれる』というタイトルのすばらしい悲喜劇の夢を見ていた。第一幕は海辺の安酒場だったよ。」

女たちふたりはそれぞれ額をペしゃりと叩いた。

ほほえみをまだ浮かべて、ルーが言った。「第二幕はどこなの。」

ルーの声は、やけになれなれしいバーテンや質の悪い女たちと陽気にたくましくはしゃぐ前に想像していたのと同様に優しいものだった。若者はルーが賢く、控えめな娘だと分かった。どんなに度しがたい仲間がいても損なわれることはないのだ。ルーの優しい人となりか心の奥まで見えて、ふたりのすけべなうそつきの防衛網もすぐに突破していくのだった。若者がこうしたことを考え、娘の優しさにことばを与え、現実の酒場から、そしてその真ん中にいる娘からも離れて、ことばの力で不実な絵を描いていると、若者はびっくりして眼を開けた。娘がほんの数歩のところへ元気よく近づいていたのだった。一文で表される服に身をつつんだ静かなる心では決してなく、かわいい娘、それも手に入れたい、そして手許に置いておきたい娘だった。ぼくはこの娘をしっかりと捕まえておかななくては。若者は娘のところへと立ち上がった。

「第二幕が始まる前に目が覚めたんだ。年寄りのお袋を売り払ってでも見たいよ。薄暗い光。紫のソファ、忘我の喜悦、ああ、ぼくの恋人。」

若者はテーブルに、娘の隣に腰を下ろした。

バーテンのハロルドはカウンターにもたれて耳に手を当てて聞いていた。

酔っぱらいは床に眠って、ごろごろしていた。顔が痰の中に埋もれていた。

「もっと早くこちらに来て、一緒にお座りになればよかったのに。」ルーがささやいた。「庭園ではわたしに話しかけない方がよかったと思いますわ。人見知りだったのかしら。」

「人見知りだったんですよ。」若者はささやいた。

「ひそひそ話はマナー違反だぞ。一言も聞こえやし

ない。」バーテンが言った。

若者が指をばちりと鳴らして、合図を送ると、夜会服姿のボーイたちが巨大な部屋の中を牡蛎の手にあちこち、せわしなく動く。バーテンはポートワイン、ジン、ナッツブラウンのビールをグラスに注いだ。

「知らない人とは飲まないよ。」フランクリンのおばさんが笑いながら言った。

「この人、知らない人じゃないわ。ジャックだったかしら。」ルーが言った。

若者は一ポンド紙幣をテーブルに投げた。「代金だ。」

始まる前から終わっていたこの夕方、その時間はナイフのように鋭い、かわいい女たちの笑い声、バーテンの話。バーテンはステージに立つべきだった。それから横に座っているルーの嬉しいほほえみと沈黙を縫うように進んでいった。いま、ルーは、自分が散歩したのと同じように、休日をひとりで長い道のり散歩して、心静かに安心しているのだと思った。ぐるぐる回る、暖かい部屋の真ん中で、ふたりはすぐ近くにいて、しかも似たもの同士だった。町も海も、それから最後の夜を浮かれ騒ぐ客たちも闇の中に消えていった。その闇もふたりには何の関係もなかった。そしてこのひとつの部屋を燃え上がるままにしてくれた。

ひとりひとり、まるで行方不明者のように、暗闇から足を引きずりながら、居酒屋の中に入ってきた。悲しそうに酒を飲み、そして出て行った。フランクリンのおばさんは頬を染め、しずくをこぼして、客たちが出て行くたびにグラスを振った。ハロルドはその背中にウィンクをして見せた。マージョリーは自分の長く白い足を見せてやった。

「みんな自分のことで手一杯。店を閉めて、くずどもが入ってこないようにしようか。」ハロルドが言った。

「ルーがオブライエンさんを待っているんだよ。でもそんなことで開けておかなくてもいいんだよ。オブライエンさんはね、いまは独立したアイルランドからやって来た、貢ぐおじさんなの。」マージョリーが言った。

「オブライエンさんが好きなのか。」若者がささやいた。

「どうしてわたしが、ジャック。」

オブライエン氏がどんな人物なのか、若者には浮かび上がってくるようだった。気の利いた、背の高い中年の男性。ウェーブのかかった白髪交じり、上唇には刈り込んだ汚い鬚、薬指の安びか指輪、皮のたるんだ訳知りぶりの目、鯨骨コルセットをつけた腰、カーディフあたりのさわやか系、勤め先の車に乗ってルーを目指して無風の街路を駆けてきているひどい恋人。空瓶でいっぱいテーブルに置いた手を若者はぐっと固めた。そうして自分の熱いこぶしの力でルーをかばっ

た。「ぼくのおごり、ぼくのおごり。たくさん。ダブルで、いやトレブルで。フランクリンのおばさんはわけのわからんおしゃべりだな。」

「母はおしゃべりなんかではなかったわ。」

「おお、ルー。君とご一緒できて、しあわせこの上ないよ。」

「クー、クー。キジバトの鳴き声を聞きなさいよ。」

「クー、クー、言わせておいたらいい。わたしもクークー言えるよ。」マージョリーが言った。

バーテンはびっくりして周りを見た。両手を挙げ、手のひらを上にして、首を伸ばした。

「鳥が一杯入ってきている。」若者が言った。

「エメラルドが卵を産んでいる。」バーテンが言った。フランクリンのおばさんは椅子をコトコトと揺らしていた。

まもなく、居酒屋は客で一杯になった。あの酔っぱらいが目覚まし、外に走り出た。帽子は茶色の溜まりに置いたままだった。おがくずが髪から落ちた。陽気で赤ら顔の年寄りのちびが若者とルーの正面に座った。ふたりはテーブルの下で手をにぎり、足をこすり合わせていた。

「愛を語るにはもってこいの夜だな。こういう夜にジュシカがユダヤ人の金持ちから盗みを働くんだった。何からの引用か分かるか。」老人が言った。

「『ベニスの商人』よ。でもオブライエンさん、あなたはアイルランド人でしょう。」ルーが言った。

重々しい顔つきで若者が言った。「わたしはてっきりあなたは小金持ちののっぽかと思ってました。」

「さて、オブライエンさん、どう受けて立つ。」

「夜明けのブランディーをといるところですか、フランクリンさん。」

「オブライエンのおじさんのことは一言も話したことはなくてよ。夢を見ていたのよ。」ルーがささやいた。「このままずっと夜が続いてくれたらいいのに。」

「ここじゃないよ。居酒屋で、じゃない。大きなベッドのある部屋だ。」

「居酒屋にベッドですと。」老人が聞いた。「盗み聞きを許していただけるなら、それこそわたしがずっと望んでいたものですよ。考えてもご覧なさい、フランクリンさん。」

バーテンがカウンターの向こうから首だけ出した。

「お時間です。紳士のみなさん、それからほかの方々も。」

フランクリンのおばさんの笑い声に合わせて、しらふの客たちは出て行った。

明かりが消えた。

「ルー、ぼくを見失わないでおくれ。」

「ちゃんと手を握っているわよ。」

「ぎゅっと握って。痛いぐらいに。」

「首でも折ってやんなさいよ。」フランクリンのおば

さんが闇の中から言った。「悪気じゃないよ。」

「マージョリー、手を鳴らせ。」マージョリーが言った。「闇から出ましょうよ。ハロルドが闇にローバーを留めているわよ。」

「それからガイド役の娘もね。」

「一本ずつ酒を持って、ルーの家にしけ込もう。」マージョリーは言った。

「わたしが全部払うよ。」オブライエンのおじさんが言った。

「あなたの方こそ、わたしを見失わないでよ。」ルーが小声で言った。「わたしにつかまってなさいよ、ジャック。ほかの人たちもすぐに出るわ。ああ、クライストさん、ふたりきりだったらよかったのに。」

「これからふたりっきりじゃないのかい。」

「あなたとわたしと、それからお月様。」

オブライエンのおじさんが居酒屋のドアを開けた。「淑女殿、ロールスロイスにどやどや乗っておくれ。紳士諸君はこれから医者診察だ。」

ルーがマージョリーとフランクリンのおばさんの後をついて出て行くとき、若者は彼女が唇にちゅっとキスをするのを感じた。

「飲み代は割り勘にするのはどうだい。」オブライエンさんが言った。

「ほら、トイレに何がいたと思う。」バーテンが言った。「こいつ、座り込んで歌ってたんだよ。」バーテンは酔っぱらいを腕に抱えて、カウンターの向こうに現れた。

みんなは車に乗り込んだ。

「最初はルーの家だ。」

若者は、ルーの膝の上で、ぼうっとした町がぐるぐる回るのを見ていた。波止場は静かで、ブーンという音を立てていた。建物の輪郭が灰青色の漏斗型、マスト型に見えていた。人のいない通りの街灯のラインが長く伸びていた。まばたきしている店がひとつひとつばちんばちんと消えていった。車は香水とおしろいと肉のおいがした。若者は偶然フランクリンのおばさんの上げ底の胸にひじをぶち当ててしまった。おばさんの腿はゆらゆらする酔っぱらいの体重を支えていた。女という塊の上で酔っぱらいはぼんぼん、ぼんぼんと跳ねていた。胸、脚、腹、手が酔っぱらいに触れ、温め、息を詰まらせていた。夜中、ルーのベッドに向かって、消えつつある休日の言いようのない結末へと向かい、みんなは黒々とした家々、橋、煙に包まれた駅を通り過ぎ、急勾配の脇道に車を寄せた。てっぺんの手すりにランプが一個弱々しくついていた。それからハンドルを切って、背の高い安アパートが建っている場所へ乗り入れた。周りにはクレーン、脚立、柱に梁、二輪の手押し車、煉瓦の山があった。

みんなは暗い危険な階段を何度も曲がりながら、ルーの部屋へと登っていった。洗濯物がドアの外の手す

りにかかっていた。フランクリンのおばさんは酔っぱらいと一緒に、みんなから遅れて、手探りでやって来ていたが、かごの中に脚を突っ込んだ。幸運の猫がおばさんの足の上を駆け、逃げていった。ルーは若者の手を引いて、表札とドアの通路を通り抜け、マッチを擦り、小声で言った。「すぐに済むわよ。オブライエンのおじさんには優しく。我慢してね。ほら、先に入って。ジャック、いらっしゃい。」ルーは自分の部屋の入り口で若者にまたキスをした。

ルーは灯りをつけた。若者は意気揚々とルーと一緒に部屋に入った。これからたびたび来ることになろう部屋だ。広いベッドがあった。椅子の上には蓄音機、隅の方に半ば隠れている洗面台、ガスストーブに調理台、扉の閉まった食器棚、引き手のないタンス、その上の厚紙枠に入ったルーの写真。ここでルーは眠り、食事をするんだ。あのダブルベッドに夜は横になるんだ。化粧を落とし、髪を巻いて、左を下に眠るんだ。一緒に住むことになったら、夢は絶対見させない。ほかの男がルーの頭の中に住んだり、愛したりなんてさせやしない。若者はルーの枕の上で指を広げた。

バーテンが中に入りながら、言った。「どうしてエッフェル塔のてっぺんに住んでるんだ。」

「たいそうな上り階段だったよ。」オブライエンのおじさんが言った。「でもここまで来ると、人目もなく、なかなかすてきな。」

「ここまで来ればだって、」フランクリンのおばさんが言った。「参っちまったよ。この厄介者が重たくて重たくて。寝ろ、床に寝ろ。眠っちまいな。厄介者だよ。」おばさんは優しく言った。「お前の名前は何なんだ。」

「アーニーだ。」酔っぱらいは答えた。顔を覆うように、片方の腕を上げた。

「アーニー、誰もお前さんを噛みはしないよ。ほれ、だれかアーニーにウイスキーを一口やっておくれ。気をつけて。コートにこぼしちゃうよ。朝にコートを絞ることになるよ。ルー、カーテンを閉めておくれよ。嫌な月が見えるからね。」おばさんは言った。

「何か考えているのかい。」

「わたし、月が好きなの。」

「人を好きになれば、きっと月も好きになるなあ。」オブライエンのおじさんは若者を元気づけるような笑みを浮かべた。それから若者の手をぼんと叩いた。おじさんの手は赤くて、毛むくじゃらだった。「ほんのちょっと見ただけで、ルーと、このりっぱな若者が惹かれあっているのが分かったよ。ふたりの目を見たら分かったよ。鼻先にぶら下がっている恋話に気づかないほど老いばれてもいないし、分からず屋でもない。フランクリンのおばさん、お前さんには分からなかったのかい。マージョリー、お前にも分からなかったのか。」

みんなが黙っている間、ルーはおじさんのことばが聞こえなかったかのように、戸棚からグラスを出した。それからカーテンを閉めた。月を閉め出した。ベッドの端に足を折って腰掛け、自分の写真をまるで知らない人を見るかのように眺めた。庭園で、最初の出会いの時、自分を崇拝してくれるちょっと前に腕を組んでいたように、若者は腕を組んだ。

「天使の大群が通り過ぎて行っているに違いない。」オブライエンのおじさんが言った。「なんて静かなんだ。何か場違いなことを言ったかな。さあ、酒を飲んで、浮かれよう。明日には死んでるさ。このきらきらの美しいボトル、いくらで買ったと思う。」

ボトルが開けられた。空瓶がマントルピースの上に並んだ。ウイスキーは減っていった。バーテンのハロルドとマージョリー。マージョリーはドレスをたくし上げ、一緒に片腕のアームチェアに座った。フランクリンのおばさんはアーニーの頭を膝に乗せ、鍛えられたきれいなコントラルトの声で、「羊飼いと娘」を歌った。オブライエンのおじさんは足でリズムを取っていた。

ルーを腕に抱きたい、若者は思った。オブライエンのおじさんがリズムを取り、バーテンがマージョリーをぐっと強く引き寄せのをその眼は見ていた。その小さな寝室でフランクリンのおばさんは甘い声で歌った。その寝室でぼくとルーは白いベッドに横たわるんだ。ふたりがびしょ濡れになるのを見て、ほほえみかける連れはいない。ぼくとルーは一緒に落ちてゆける。熱く溶けた石で冷たい身体が重たくなって、潮が引いていく海、真っ白で、何もない海へと落ちていくこともできる。そうして浮かび上がることもないのだ。婚床のベッドに、ぼくの吐息が聞こえるくらいにすぐ近くに座って、ルーはふたりが出会う以前よりも遠くところらにいた。何もかもがぼくのもの、でもルーの身体だけは手に入らない。ルーはぼくに二度キスをしてくれた。そうした始まり以外のものはみんな消えてしまった。オブライエンのおじさんには優しく、そして我慢しくちゃならない。年寄りの、あの包み込むような笑みも、鉄のようなこの手の甲でぬぐい去ることもできる。沈め、沈め、ハロルド、マージョリー。オブライエンのおじさんの足許で鯨みたいののたうち回れ。

灯りが消えたらいいのにと、若者は思った。暗闇なら、ぼくとルーはシーツの下で忍び寄り、死んだように動かないでいることもできる。ふたりが死んだようにじっとして、音も立てなかったら、そんなところにいるって誰が思うだろう。目もくらむような階段に向かってみんな声をかけるだろう。ものがたくさん置いてある狭い廊下を探し回るかも知れない。あるいは夜の中へと転がり出て、壊れた家々に囲まれた荒涼とした場所に置いてあるクレーンやはしごの中を探し回るのかも知れない。若者は眼をつぶった暗闇の中、

オブライエンのおじさんが声を上げるのを聞いた。「ルー、どこにいるんだ。答えなさい、答えなさい。」うつろなエコーの返答が「答えなさい。」というのが聞こえた。そして冷たいベッドのくぼみの中でルーの唇が密かに動いて別の名前を形作るのが聞こえ、また唇が動くのを感じた。

「すてきな歌だったよ、エメラルド。かなりいけない歌詞だったね。羊飼いだろ。」オブライエンのおじさんが言った。

床に転がっているアーニーがすねた太い声で歌い出した。でもフランクリンのおばさんは自分の手をアーニーの口に置いた。アーニーはその手を吸い、鼻を押しつけた。

「この若い羊飼いはどうだい。」オブライエンのおじさんがグラスで若者を指した。「恋愛くらい歌も上手かな。頼んで見てくれよ、ルー。きっと夜歌鳥みたいに歌ってくれるよ。」

「歌える、ジャック。」

「カラスと同じだよ、ルー。」

「詩も詠えないのかな。自分の女に詩を朗々と聞かせることもできない若者を恋人にするとは。」オブライエンのおじさんが言った。

戸棚から赤い表紙の本をルーは持ってきて、若者に渡した。「この中からひとつ読んでくれる。つぎの巻は帽子入れの中よ。心のなごむ詩を読んでちょうだい、ジャック。そろそろ日が変わるわ。」

「恋愛詩だぞ。その他はだめだ。」オブライエンのおじさんが言った。「恋愛詩しか受け付けないぞ。」

「静かで、センチメンタルなのね。」フランクリンのおばさんが言った。おばさんはアーニーの口から手を離し、天井を見ていた。

若者は、渡されたテニスの著作集の第一巻のはじめの遊び紙に書いてあったルーの名前、ルーの名前は長く伸ばした、と銘刻を大声ではなかったが、声を出して読んだ。「日曜学校の教師グイネス・フォーブスよりルイザへ。神は天におはします。この世は御心のままに。」

「恋愛詩だよ。忘れるな。」

若者は大声で読んだ。文字が躍るのを止めるために片目をつぶって、「庭に出ておいで、モード」を読んだ。第四連まできたとき、若者の声はさらに大きくなった。

ぼくは百合に話しかけた。「あの娘が心楽しくする相手はただひとり。

踊り手たちはいつあの娘をひとりしてくれるんだろう。

あの娘は踊りと遊びに飽きたというのに。」

さて、半分は沈みゆく月の方角へ、
半分は登り来る日の光へと、
砂の上では小さい音、石の上では大きな音、
最後の車輪が音を響かせ去ってゆく。

ぼくはバラに話しかける。「短い夜は
おしゃべりと、騒ぎと、ワインの中で過ぎてゆく。
おお、人を恋した若い君の、そのため息はなに。
自分の手には入らないもののためなのか。」
でもぼくのものなんだ、ぼくのものなんだ。ぼくは
バラに誓う。
「いつまでも、いつまでも、ぼくのもの。」

詩の終わりで、ハロルドが突然言った。頭は椅子の
腕から乗り出していた。髪は振り乱し、口は口紅で真
っ赤だった。「ぼくの祖父はテニスに会ったときの
ことを憶えているよ。背の低いせむしだったんだ。」

「いや、」若者が言った。「テニスは背が高かつ
た。髪が長くて、あごひげを生やしていたんだ。」

「会ったことがあるのかい。」

「そのころぼくは生まれていなかったよ。」

「祖父は会ったんだ。せむしだった。」

「それは同じテニスじゃないんだよ。」

「お前はテニスを間違えているんだ、これは有名
なせむしの詩人だぞ。」

ルーはすばらしいベッドに横になり、その広い町、
その狭い世界、こんな世界、つぶれるに違いないが、
美醜も年齢も問わず、すべての男をひっくるめ、その
内のただひとり、若者を待っていた。そして顔を下げ、
若者に投げキスをし、ベッドカバーに当たっている光
の川に手を浸した。若者には、その手は透明になった。
ベッドカバーの光はしだいに強くなり、ルーの手のひ
らと指の形になった。

「おじさんに尋ねてみなよ、テニスがどんな人だ
か。」フランクリンのおばさんが言った。「オブライ
エンさん、ねえ、詩人はせむしだったの、そうじゃな
かったの。」

若者以外の誰も、ルーがかすかに愛おしそうに動く
のを見て取った。若者のために生き、その答えを待っ
ているのだ。ルーは輝く手を左胸に置いた。唇に指を
当て、内緒の合図を送った。

「ことに依るなあ。」オブライエンのおじさんは言っ
た。

若者はもう一度片目をつぶった。ベッドが船のよう
に揺れていたからだ。タバコの煙から吐き気を催す熱
い風が戸棚とタンスを揺るがしていた。海に行くベッ
ドルームの動きは若者が巧みに片目をつぶると、静ま
った。でも若者は夜の風に当たりたかった。船乗りの
脚で、ドアまで歩いていった。

「二階の通路の奥に衆議院が見えるだろう。」オブラ

イエンのおじさんが言った。

ドアまで来ると、若者はルーに振り返り、ありった
けの愛情を込めて、ほほえんだ。みんなの顔に向かっ
て、愛情を宣言したのだ。するとルーはこちらを向い
て、おじさんがねたましそうに見ている前で、「遅く
ならないで、ジャック。お願い、すぐに帰ってきてね。」
と言った。

いまや、みんなが知っているのだ。愛が一晩の内に
育ったのだ。

「一分だよ。すぐに戻るよ。」

ドアが背中で閉まった。若者は通路の壁の中へと進
んでいった。マッチを擦った。三本残っていた。べた
べた、ぐらぐらの手すりにつかまりながら、階段を下
り、床板上でシーソーのように揺れ、バケツにすね
をぶつけ、ドアの向こうの秘密の生活から聞こえてく
るざわめきを通り過ぎ、けつまずき、ののしった。す
るとルーの熱気を帯びた声が若者を駆り立てるのが聞
こえた。戻ってくるよう呼びかけていた。熱く、そし
てやけになって、若者に話しかけているのが聞こえて
きた。それで暗闇、そして急いでいたためにけがをし
たその痛みにもかかわらず、若者は目がくらみ、一撃
を食らったようにじっと立ち止まった。ルーは喋って
いた。その結構な家の真ん中の腐りかけた階段の上で、
驚くべき速さで愛のことばをとめどなく喋っていた。
ルーの口から、若者の耳に、愛情のことばが飛んでき
て、燃えさかっていた。急いで、急いで。一瞬一瞬が
消滅していった。愛して、大好き、あなた、戻ってき
て、口笛を吹いて、ドアを開けて、わたしの名前を叫
んで、わたしを抱いて。オブライエンのおじさんがわ
たしを捕まえているわ。

若者は洞窟の中に走り入った。風がマッチの火を消
した。腰をかかめて部屋の中に入ると、床にふたりの
人物が黒い塊となって、横たわり、ささやいていた。
若者は狼狽して飛び出した。通路の端っこで小便をし
た。ルーの部屋へ急いで戻った。そうして家のでっぺ
んの、物音しない階段にようやくたどり着いた。若者
は手を伸ばした。でも手すりは壊れていて、ゆがんだ
支柱に沿って地面にずっと落ちていくのを止めるもの
は何もなかった。その支柱のせいで若者の叫び声はこ
だまし、二倍の大きさになるだろう。壁に開いた穴か
ら眠っているかごそごそ動き回っている家族を引きず
り出すだろう、あのささやいていた人物も、ベッドで
寝返りを打っている人たちをも、昼の日の中に引きず
り出すだろう。屋根近くにある穴道で迷い、若者はド
アを探して、湿った壁を指で伝った。取っ手を見つけ、
ぐっと握った。でも取っ手が取れてきた。これよりず
っと長い通路をルーはやって来たはずだ。若者はドア
の数を思い出した。それぞれの側に三つずつあった。
手すりの壊れた階段を走って降りて、別の通路に入っ
た。そして手を壁伝いに這わせた。ドアが三つ、若者

は数えた。三つ目のドアを開けた。闇の中に歩いて入り、左壁にあるスイッチを手探りした。灯りがぱっとついて、ベッドと戸棚、取っ手のないガスストーブ、隅の洗面台が目に入った。ボトルもない、グラスもない。ルーの写真もない。赤いベッドカバーは乱れていなかった。ルーの部屋のベッドカバーの色を若者は覚えていなかった。

若者は明かりをつけたままにして、二番目のドアを開けた。でも、半ば眠った、知らない女の声が言った。「誰なの。トム、あなたなの。明かりをつけなさいよ。」若者はドアの下から漏れる光の筋を探し、つぎの部屋へと行って、立ち止まって声を聞いた。二番目の部屋ではまだ女が呼んでいた。

「ルー、どこなんだい。答えておくれ、答えておくれ。」

「ルー、ルー・何って言うんだい。ルーなんてここにはいないぜ。」男の声が言った。最初の暗い部屋の、通路に向かって開いたドアからだった。

若者はあわてて別の階段を下りた。そしてひっかき傷のついた手で、ドアを四つ数えた。ひとつのドアは開いていた。寝間着姿の女が顔を出した。子どもの顔がその下に覗いた。

「ルーの部屋はどこなのでしょう。どこか知ってますか。」

女と子どもは答えずにじっと見ていた。

「ルー、ルー、名前がルーなんです。」自分が叫んでいるのが分かった。「ここに住んでいるんです。この家に住んでいるんです。どの部屋か分かりますか。」

女は子どもの髪をつかみ部屋の中に入れた。若者は女の部屋のドアの端をつかんだ。女は腕をドアの隙間から出して、鍵の束を若者の手に振り下ろした。ドアはバタンと閉まった。

ショールに子どもをくるんだ若い女が反対側のドアから覗いていた。そして若者が走って取りすぎようとするとき、袖をつかんだ。「ルー、何。子どもを起こ

したわよ。」

「姓の方は知らないんだ。フランクリンのおばさんとオブライエンのおじさんと一緒にいる。」

「赤ん坊が起きたわよ。」

「中に入って、ベッドで探しな。」若い女の背後の闇の中から声がした。

「この人だったのよ。赤ん坊を起こしたのは。」

若者は濡れた手を口に当てて、通路を走った。階段がおしまいになるところで、手すりにぶつかった。若者の耳にはルーが戻ってらっしゃいともう一度ささやくのが聞こえた。一階の床が手すりに向かってぐっと上がった。空瓶で一杯のエレベータのようだった。急いで、急いで、待てないわ。待たないわよ。婚礼の夜は台無しになるわよ。

腐れた山のように高い階段に、あちこちぶつけながら、若者は登っていった。吐きそうだった。明かりをつけたままにしておいた通路まで戻った。明かりは消えていた。ドアを全部叩いて、ルーの名前をささやいた。ドアを殴り、叫んだ。チョッキを着て帽子をかぶった女が杖を振り回して、通路から追い出した。

長いこと若者は階段で待っていた。もう自分が待つてやれるような恋人はいない。ベッドも何マイルも離れたところにある、自分の部屋のものだけだ。そしてこの先には夜明けがあるだけだ。夜が明ければ、自分の発見を思い出させてくれる。若者の周りには眠りを邪魔されたその家の住人たちがまた眠りに落ちているのだ。それから若者は家を出て、がらくた置き場の傾いたクレーンとはしごの下に立った。

ランプの光が弱々しく、くすんだ円形になって、れんがの山に、折れた木材、かつては家であったろうごみに当たっていた。そこには小さくて、名前なんかほとんど知られることのない、でも忘れることのできない人々が、汚い町の人々が、生きて、愛して、死んで、そしていつだって無となっていったのだった。